GATE　21

第１１号

２０１１年2月２８日

目次

裏切りの記憶

福田　恒昭

いつだか見知らぬ一人の男に話しかけられたことがあった
ミズホは元気かとこれも
知らない女のことを訊かれて
俺はうすら笑いを浮かべながら
もしかして俺には瑞穂という女がいて
今この広場で待ち合わせていたとしても
少しも変ではなくて、むしろそれが自然であるような
そんな気持ちになって、ああお前に会いたがっていたよ、また
今度飲もうぜ、常になく上機嫌にそう答え、じゃ、電話するよと言って
立ち去ろうとする俺に男は、ちょっと待てよ、そりゃないだろ、あいつに会わせろと
しつこく食い下がるから、いや、ほんとは人違いだよ、なんて今更そんなことが
言えるわけもなく、仕方がないから携帯で適当な番号に電話をしてみようと
するのだが指が覚えていた昔の女の番号に電話してしまい、俺だよ、おまえに会いたいと
いうやつがいるからと、何だかどうでもいい気持ちになって、かつてお互いに相手を裏切りながらその汚さを相手に

なすりつけるように付き合っていたその女にこの見知らぬ男を引き会わせてやろうと、俺は高架沿いの道を西に向かった。

進化と退化の間で

柴原　利継

それはほんの些細なこと　風に揺れる梢の記憶のよう

鳥が大空に羽ばたいて
僕の肩胛骨はわずかに上下に震えはじめた
くすぐったいよ
犬がしっぽを振りだして
僕の尾てい骨は少しだけ左右に動きはじめた

むずがゆいよ

それはほんの些細なこと　遠くから聞こえる祭だいこ

退化した者たちをときどき懐かしむ時の
季節の変わり目辺りで
ときおり僕を包み込むＤＮＡの感傷
あるいは　僕が僕であることの
幾重にも重なり合う螺旋状の鎖が奏でる
アンビヴァレントな旋律

それはほんの些細なことだから
誰も何も気づかないみたいで
すがすがしいほどの日常

「進化」という名の「退化」
そのまどろみの中で

「退化」という名の「進化」
が風に揺られては　しのぶ
もじずり
の花のように

部屋

生駒　正朗

　旅から戻ると部屋はがらんどうだった。物がなくなって狭い部屋の本当の狭さが迫ってくる。あったものたちの気配が残っていたが、今、その気配だけでは、狭さを増してくる部屋は支えきれない。
　急いで街に出て部屋に運び入れるものを手当たり次第に

探した。
　公園の暗がりを走り抜ける。人の気配を避けようとしたが、人の気配が迫って来て、逆にぶつかってしまった。闇の中に女の気配が乱れて漂っていた。暗がりを探って女の身体を探した。
　部屋はもう閉じかかっていたが、女の身体を運び入れ、自分の身体をねじ込むと、放射状に広がった女の髪に従って部屋が立ち上がった。しばらくすると窓もできる。月の晩には光も射し込むだろう。
　あと何かを持ってくれば、すっかり新しい部屋ができる。また街に出て、当てもなく歩き回っている。
　部屋はまだ不安定で潮位が変化するように収縮を繰り返していた。

職場小景

塚本　敏雄

職場の同年代の同僚が
意味ありげに寄ってきて手招きする
何ごとかと思えば
「このあいだ飲み会で君が話してた
　ケーキ屋のことだが」

それは市内でおいしいと評判の
二、三年前にできた菓子店のこと
確かに先日の飲み会で
女子職員も交えた車座のなかで
話題に出た

彼は
場所を教えて欲しいんだけど

と
声をひそめて
辺りを見回すしぐさで聞く
まるで
重要機密を聞き出す産業スパイみたいな
様子で

ああ、あの店ね
南大通りから入ってね
と
わたしが傍らのホワイトボードに
地図を描きかけると
彼は慌てて
いや、話だけでだいたいは分かるから
と
わたしがホワイトボードに描きかけた線を
急いで消した

勤務時間中に
ケーキ屋の場所を教えてもらうなんて
不謹慎なことだと
本気で恥じているようだった

だいたいケーキなんて
ひとりで買いに行くような男ではない
わたしだって妻に付き合って
何回か行ったことがあるだけだが
勤務マニュアルがネクタイ締めたような
真面目な男が
それにしてもなぜと考えて
思い当たった
彼の若い妻が二週間ほど前に
心臓か何かの病気で入院し
昨日退院したことを
他の同僚からたまたま聞いていた

翌日彼は
嬉しそうに
だがちょっと恥ずかしげに
昨日行って買って来ましたよ
と
書類を読んでいたわたしの懐に
そっと言葉を投げ入れて去った

少女

大隅　晃弘

遠い記憶の欠片を集めようと
入組んだ路地を歩きつづける
頼まれた遣いを済ませようと子犬が先を行く
後を高級車が窮屈そうに徐行する
その漆黒に照り光る潤んだ曲面には
さびしい枯野が歪んで映し出される

色彩を忘れた大地
にわかには把握できない全景
無意識の衝動に身を投げる

聞き覚えのある旋律が蘇り
太陽のにおいが胸を満たした
視界の一部が少しずつ色彩を取り戻す

時間の扉が開放されたように
木立の陰から素直に伸びた脚がゆっくりと歩み出した
ここが自身の居場所なのかと辺りを軽く見渡す
肩まで届かぬ髪が輝きながら揺れた
確かにここであると認めて腰をおろすと
枯野のはるか先にある何かをただ眺めている

高級車がまた窮屈そうに動きだす
漆黒に浮かぶ枯れ野は消え去った
その先に見える小さなベンチには
背を丸めた老婆がひとり
そこがずっと自らの居場所であったというように

【ゲスト招待作】

砂遊び

松本　邦吉

寒の入

一月初めの人体が
笙ひちりきの音(ね)のなかを
ながれていく
からだを発見し　ともに生きるために

鶴のゆくえ

寒暁の

世界が明晰な意識を運んでくるとき
人体は哀しいか
否！　と　何かのするどい声
人体をなでていると
突然　からだが生まれる気配をみせて
驚いてとびたつ一羽の鶴

水のほとり

人体の影は何ものかの翼
からだの影は
否定され／肯定され
白磁のように
幾億年の太陽のひかり

帰り道

寒月の
落葉をふんでいく
人体と　からだと

いま　ふっと　忘れた?
ほら　ね
断崖に　たった　とたん　に
宙に　舞って　いる
人体と　からだと　の　あいだ

夜半を過ぎれば
もっと深く穴を掘ってくれと
せがんでくる

なぜ人に生まれることができたのか

旅人に

「ホラホラ、これが僕の骨だ」　　＊中原中也「骨」

中也の詩の一節に
笑いがこみあげてくる
なんだか　ごめんね　と言いたくなる
観念は　いまも
切実なうつくしさを保っているか

カタール、ドーハ

寒夜　歓声があがる
人体が人体にどうとぶつかる　音
午前一時半を過ぎたというのに

（どれだけ走りつづければよいのだろう）
まだ試合終了のホイッスルは鳴らない

国家　国土　国境を越えサッカーを観戦しながら
詩を書こうとして
（この無謀な試み）
生まれたのは俳句が一つ

《寒の月たたかふもののうつくしき》

両チームともに譲らず
延長戦へ
（熱い珈琲でも淹れなおそう）

人体とからだが　躍動し
一瞬間　一つになり　空中へ跳躍した
シュートと名付けられる　一連の動作

（愛した想い出がよぎる）

朝まで　あと三時間
ボレーシュートの
ボールは宙にとどまったまゝ
（ひとり　蛍光灯の下）

寒明け

寒晴の空の奥で
水がゆらめきだす

無名の　無時間の　無言の
空の　渚の　砂の　足跡
たちまちに消えてしまう

もう死んでしまった者たちも……
まだ生まれてこない者たちも……

昨年のうちから
ピアノの上に置かれている
鉢植えのシクラメン

今宵は新月

今日不知誰計会
春風春水一時来　　＊白居易「府西池」

手紙

春の海
まぶしい波のはてに
きこえていない音楽を聴くための
座り心地よい椅子が　一日中

浮かんでいます

（連作『砂遊び』のうち）

特集【短詩と長詩】

きっかけは、吉岡実の『「死児」という絵』というエッセイ集に収められているタイトルエッセイを読んでいて、次の箇所にあたったことだった。

「あるとき、ラドリオで伊達得夫とお茶をのんでいたら、突然、〈ユリイカ〉の十頁をお前にやるから、一つ長編詩を書けと厳粛な面持ちできりだした。それは二段組みで四百行位の長さになるだろうか。私は三百行にしてくれないかと言ったら、よかろうと微笑した。ただしか一ヶ月以上の時間を与えてくれた。しかし、日がたつにつれ、私の不安はつのるばかりだった。いままでに、百行を越すような詩は書いていないし、私の詩法ではどう考えても不可能だと思った。それで数日あと、伊達得夫のところへ行き、二百行にしてくれと申込んだら、百行値切られたかと苦笑した。」

これまで、様々なテーマで特集を組んできたが、いまだ長編詩というテーマは扱っていない。次はこれでいこうと決めた。

しかし誌面の関係で、五人全員が長編を書いたらページ数が大幅に増えてしまう。そこで、短詩と組み合わせればページ数を幾分調整できると考えた。五人のうち今回は二人が長編詩、三人が短詩という構成にした。もちろん今回長編詩を書いた者は次回には短詩を、今回短詩を書いた者は次回は長詩を書くことになる。

私は今回長編詩を書く分担になったので、どう書こうかと考え始めたみたら、これは大変なテーマを設定してしまったのではないかと後悔の念が漂い始めた。これまでの特集は「夢」であったり、「献呈詩」であったり、詩の内容やテーマに関係している。しかし長詩というものは、詩の枠組みというか、物理的な側面に強く関連している。

戦後詩の名編集者として名高い伊達得夫がなぜ吉岡にそのような提案をしたのかはよく分かる気がした。二百行という設定はこれ以上ないくらいの強制的な枠組みで、それによって詩を書く作業が影響を受け、結果的にエクリチュールそのものを変える現場を見てみたいという意図が彼にはあったはずだ。現在、「現代詩手帖」などの雑誌で連載詩や長編詩があるのも同じ意図だろう。

私たちも伊達得夫にならって二百行という制約を設けた。今回は福田恒昭と塚本がその強制力と格闘した。次回は他の三名が格闘することになる。

なお、短詩には四行詩という制約を設けた。この制約も長詩同様に強制的な力を持ち、短詩担当の三名も四行という強制力と格闘したことは言うまでもない。

（塚本敏雄）

失望

生駒　正朗

結んだ草に足を取られた
顔を上げると
陽炎が立っていて
地面が切り取られていた

はいぱーあんどろいど

柴原　利継

そのスクリーンは何でも映し出してくれたので
結局何ひとつ映し出してはくれなかった
一方心が内に向かって巧みに嘘を持ちかけるので
断片化された記憶が暗室の中で無数の物語を紡ぎ始めていた

月の翼

大隅　晃弘

もぎ取られた翼を埋める
硬く冷たい土を掘って
一片の羽が掌中から舞いあがった
天には淡い半月が浮かんでいた

光の方へ（H・Mに就いて）

塚本　敏雄

沈黙がか細く鳴る
静謐の深みで
やがてあなた方は
目撃することになるだろう
螺旋状のダンスを

＊

彼は白いカンヴァスを前にして　最初の一筆を入れるのをためらい　いつまでも立ちつくす　どのようにでも描ける　だが描いてしまえば　それ以外のものを描く可能性を　全て閉じてしまうことになる　そのことを彼は怖れる　彼は深く怖れて　いつまでも立ちつくす

＊

一八九〇年　初めて描いた油絵に
EssitaM.H と署名を入れた
自分の名前をもじって

＊

まずは
土地の移動
その記録としての年譜

一八六九年　ピカルディ
一八八七年　パリ
一八八九年　ピカルディ
一八九一年　パリ
一八九五年　ブルターニュ
一八九八年　ロンドン　コルシカ
一八九九年　パリ
一九〇一年　スイス

一九〇四年　サン・トロペ
一九〇五年　コリウール
一九〇六年　アルジェリア
一九〇七年　イタリア
一九〇八年　バイエルン
一九〇九年　パリ郊外　ベルリン
一九一〇年　ミュンヘン　スペイン
一九一一年　モスクワ　モロッコ
一九一四年　コリウール
一九一六年　ニース
一九一七年　マルセーヌ　ニース　カーニュ
一九一八年　アンティーブ　ニース
一九二〇年　ロンドン
一九三〇年　ニューヨーク
一九三三年　フィラデルフィア
一九四〇年　ボルドー　ニース
一九四一年　リヨン　ニース
一九四二年　ヴァンス
一九四五年　ロンドン　パリ
一九四八年　ヴァンス
一九五四年　ニース

軽やかなステップの履歴のように
分布する
年号と土地の名

＊

ピカルディ地方
ル・カトー＝カンブレジ
それは
豊穣なる大地のうえの
小さな織物業の町
だが
幼少の織物の記憶が
いつまでも風の中になびくことになろうとは
この時点では彼も予想だにしていなかった

いずれ現れる
モロッコの意匠との共鳴

＊

しかしやがて彼は知ることになるだろう
アラベスク文様
偏在する神の青い影
叡智のことばを可視とする営み

＊

どこまでも続く青い壁の後ろから
見たこともない子供が現れる
ねえ　おじさんはどこから来たの？
あの「門」の向こうからさ
キミはここら辺の子かい
その子はわたしの問いを
下らないことなど聞くなとばかりに無視し
逆にわたしに問いかけた
ねえ　捜し物は見つかったの？

＊

病歴を記す
転換点としての

一八九〇年　虫垂炎
一九〇一年　気管支炎
一九四一年　十二指腸癌
一九五一年　喘息　狭心症
一九五四年　心臓病

＊

植物の繁茂
それもダンス
文法の逸脱
それもダンス
色彩の横溢
もちろんそれもダンス
つまりは

「生きる悦び」

螺旋状に進んでいく運動に
予見された単純化の影

＊

晩年にＨ・Ｍは語る
（私は一個の媒介に過ぎなかったのです）
（私を介して）
（世界の美しさがいささかなりとも）
（啓示されなければならかなったのです）
芸術家としての
控えめだが揺るぎない自負

＊

キミには昔どこかで出会わなかったろうか
もう二十年か三十年か前のこと
でもそれじゃあ計算があわないな

わたしが会ったのは子供だった
だとすれば
もう随分な年齢になっているはずだからな
長く生きていると
不思議なことが幾らでもあるな

＊

テーマがあり
テーマとテーマを繋ぐ
即興があり
つまりは
音楽が響き
色彩のジャズが紡がれる
一見は手慰みのようにも見られた
作品群の葉陰で
誤解の雨粒を振り払うように
最晩年の彼は毅然として宣言する
これは出発点ではなく
終着点なのだ

と

＊

晩年　病を得た彼は切り絵を始める
絵筆の桎梏から解き放たれた
かのように
彼の意匠と色彩は踊り始める
未来への架橋として

＊

そうさ　ボクらは確かに
前に会ったことがあるよ
あれからずっと
ここで待っていたんだよ
こんなにも長い時間がかかったけど
おじさんの世界じゃそういうものなんでしょ
許してあげるよ
だって

とにかく間に合ったんだからね

＊

ここは庭園か
それとも旅芸人のテントか
「見る気にさえなれば、
　花はいたるところにある」
今日最後の列車が着く音が聞こえる
この駅より先には
線路は敷かれていない
今日はもう戻りの列車もない
どこか
泊めてくれるところはありませんか
駅で買った新聞の日付を見れば
それは十一月三日のこと
ああ　いいホテルがありますよ
確かレジナという名の

＊

キミの眼の色は
見る度に変わるね
その色を再現できた試しはない
だが
わたしはそのことを悔いたりはしない
むしろ幸せな気分だ
と
彼は言ったかどうか
それらしきことは確かに言ったはずだが
そして
そのようにして
彼の一日は暮れた

（文中、アンリ・マティスからの引用あり）

森に棲む魚

福田恒昭

＊

人生の終わりに老人
すなわち私は
木々に囲まれた夕暮れの庭の
池のほとりにしゃがみこんでいる
鬱蒼と生い茂る木々に覆われた
緑色の濁った池
その水面を見つめるとき
木々の葉が風にさわぎ
始まりも終わりもない時間が
たゆたっている
それはそのまま
幼いころの
時間である

――全速力でぼくは走って、急に
立ち止まる
大きな空で夕焼け雲がゆっくりと
めぐるから
地球の反対側では
だれかが死ぬだろう
そう確信した
それはぼく自身かもしれない
だけど今は
ぼくは生きて生きて
生きている
どこまでも行ける
夕空の向こう側のすべては
ぼくのものだ
魚取りの網を手に
小川のほとりを走る
水鳥が次々と
飛び立っていった

＊

――夢の記憶を追いかけて見失う
特別なことではない
過ぎ去った時間はすべて
つかむことの不可能な
どこかへと消えていき　なのに人は
信じすぎる　それだけのことだ

＊

森を発見する
ぼくの森
魚を求めて小川をさかのぼり
見つけた
森の下映えを覆い尽くすように
透明な水が行きわたり
魚たちが
木々の根をくぐりぬけている
森のなかではぼくも
ただ一ぴきの　生き物だ

ぼくは彼らの国に招待された
唯一の人間だ
と思っていた
彼女に出会うまでは

*

「わたしはきれいなものしか
見たくない
おしゃれな服を着てお気に入りの靴をはいて
わたしはつぎつぎと
みにくい男たちに見つめられるから
きっとますますきれいになる
わたしはほんとうはみにくいものが
好きなんだ
みにくいものを吸いこんで
ますます磨かれていく
期待して　神さま」

*

森は心
森は魂
ぼくの心臓のその向こうを
あいつは知っているのか
あり得ないよ
どうして彼女がここにいるんだ

*

「あなたはとなりのクラスの子だよね
なぜここにいるの
わたしが見つけたんだよ
魚たちとわたしは
友達になったの
わたしの言うことをみんな
きいてくれるよ」

*

ぼくの森だよ
それを知らないのか
ぼくがこの森の
王だ
この森に棲む
魚たちの
昼でも薄暗いから
電灯をつけたのだ
どこにいてもぼくの声が届くように
スピーカーをつけたのだ
だけど魚たちは彼女を選んだ
彼女の声
「ヒロコが死にました
みなさん　集まってください
とむらうのです
ヒロコの体を　食べるのです」
腹を見せて斜めに浮かぶ白い鯉を
ついばむ魚たち
透明な水は
血に染まる

てらてらと輝くうろこと
魚たちの跳ね上げる水を
マイクを持った彼女が
見下ろしている

＊

「あなた
わたしを好きでしょう
知ってるの　美術の時間に
いつもわたしを見ているのを
でも　やめたほうがいいよ
わたしは悪魔に魅入られた女だから
ここはわたしの神聖な場所
ひとりきりで立ち向かうの　あいつに
だから近づかないで
わたしには怖いものがない
ただ一つを除いて」

＊

怒りと欲望がいりまじった
どろどろの気持ちを抱えて
ぼくは森に向かう
彼女に支配されたふりをして
実は憎んでいる
魚を見るふりをして
彼女の白い脚をじっと見つめる
ぼくにとって
森はしだいに彼女自体になっていく

＊

「魚たちが脚にまといつくのが
とても気持ちがいいの」
彼女は服のままで
水に横たわり
スカートの裾から入り込む
魚をよけもしない
沸き立つように

群れ集う魚たちのただなかで
彼女の白い肌がしだいに紅潮していく
それをぼくはじっと見つめていた

＊

彼女に支配された
美しい森にぼくは肉食の
異形の魚を持ち込んだ
彼女のものになってしまった
森を取り戻すためなのか
彼女をけがすためなのか
分からないまま
グロテスクな魚を森に放つ

＊

「おかしな魚を見つけたの　きっと
あなたとわたしの森に
あいつが送り込んだんだ

わたしたちの魚たちが
たくさん食べられてしまった
これからお葬式をするの」

＊

厳粛な葬儀ののち
ぼくが用意したナイフを手にして
ぼくらはいっしょに
異形の魚を探す
ぽっかりと木々が開けた空間に見つけた異形の魚は
多くの魚を食って肥え太り
悠然とぼくらを見つめている
ナイフを振り上げた彼女が
飛沫をあげながら走っていき
やがて異形の魚に食われていく
血に染まった水面に
彼女の背中がしばらく浮いていたが
やがてそれも最後に沈んでいった
ぼくはそれを
妖しいときめきとともに見つめていた

＊

――人生の終わり
老人すなわち私が見つめる濁った池の奥から
ゆっくりと浮かび上がる一匹の魚
老人は
それがあの少女ではないかと
思うのだった

【断章集11　EDGE】

現実に寄り添う詩

生駒　正朗

◇

本誌10号の福田恒昭氏のエッセイ「吉岡実に比喩は存在するか?」を読んで、今まで分からなかった吉岡実の詩について理解が一歩進んだ気がした。

福田氏は以前から比喩のおもしろさが分からないと言っていたが、吉岡実の作品を通して比喩についてよく考えているなあ、いや、比喩を考えることを通して吉岡作品についてよく考えているなあと感心してしまった。

吉岡実は「現実から離脱することで言葉だけでできている詩作品を作った」、「狭い個人としての自我を捨て去った」という福田氏の考えに十分に共感できた。

◇

しかし、このエッセイを読んで吉岡実とは別の手法によって作られた作品について考えたくなった。吉岡実が現実から離脱する試みをしたのなら、現実に寄り添った作品にはどのようなものがあるのだろうかと。読書会で吉岡作品を多く読んだ反動でもあるのだろう、現実や思想に根差した詩について考えてみたくなったのである。

その時、以前に買って机に積んだままになっていた藤井貞和氏『湾岸線争論』、『言葉と戦争』を読む気が湧いてきた。この本を読みたい気持はこれまでもあったのだが、当時の論争についての知識不足を感じていて、読み始められなかったのである（ちなみに、この文章を書いている今でも知識不足はあまり解消していない）。

この本は、約２０年も前の論争に端を発している。すなわち、湾岸戦争に対して雑誌『鳩よ！』が組んだ特集、また、藤井氏が書いた「アメリカ政府は核兵器を使用する」という作品が批判されたことがその成立に関わっている。失礼を顧みず藤井氏の考えをまとめると次のようになる。

詩の言葉は無力だということを覚悟したうえで、つまり現実を変えられないということを承知したうえで、それでも一言論人としてできることはＮ０を言い続けることだけである。たとえ、惨害に対抗し得る言語の表現がなくても、語らされていると思われ

ても、絶望の表現ととられても、詩にだけ可能な鮮烈な表現にならなくても。

藤井氏は「詩は無力」「言葉は無力」ということを繰り返し確認したうえで、言葉は無力だと考えて何もしないのではなく、それでも長い間真剣に詩の力を追究し、何ができるかを考えてきたことが伝わってくるのであった。

◇

行きがかり上、戦争というテーマに傾くことになった。これまで詩を鑑賞することが少なかった私ではあるが、三つほど採り上げたい作品がある。第一に、塚本敏雄氏『英語の授業』「人称について」である。私はかつて職場の同僚だった塚本氏からこの詩集を贈られ、詩の世界に誘われたのだった。この詩集を読んで、英語の人称を採り上げると同時にイラク空爆に対する批判を述べたこの詩に私は素直に惹かれた。

人称について

さて
よく知られるように
英文は必ず人称から始まります
例えば
「ここら辺は雨が多い」という言い方を英語では
We have much rain here.
と一人称から始め
「北海道では雨が少ない」と言うとき 英語では
They don't have much rain in Hokkaido.
と三人称で語ります

ぼくは
はじめてこういうことを知ったとき
we という人称がにわかに
自分を含めた共同体の像として見え
they という三人称が
身も知らぬ人々の集団に見えてきたことを思い出す

「彼ら」とはいったい誰だろう
遠い空の下で暮らす会ったこともない人たち
we と they という

峻別の酷さ
「彼ら」にはいつも顔がない

遠い空の下
「彼ら」のもとに
砲弾が降り注ごうとしている

2002年3月イラク空爆開始

この詩を塚本氏がどのような思いで作ったのかは聞いたことがない。人称に対する思いが先か、イラク空爆への批判が先か、どちらもか、などということについては。しかし、そういうことはどうでもよく、英語教師として身近に感じる「人称」を手がかりとして、非日常的でありまた、現実として実感しにくい「イラク空爆」がつぶやきのように、また、あきらめのように描かれているように感じられた。あらためて読むと塚本氏も言葉は無力であるということを認識し、それゆえに直接イラク空爆について述べることを避け、人称というテーマを据えることで詩の堅牢さを築いたのだと思う。そして私は、そこに惹かれたのだった。

◇

そしてもう一つ。中村稔「しめやかな潮騒」。この詩は『詩のレッスン』—現代詩一〇〇人・21世紀への言葉の冒険—（編著者　入沢康夫　三木卓　井坂洋子　平出隆）で知ったものである。

しめやかな潮騒—押韻詩の試み
中村稔

耳底にかすかに鳴っているしめやかな潮騒、
貝殻をひろいながら見遣っていた日没、
突然藍色の波を焦がした黄金の果実、
漆黒の闇ふかく沈んだ私たちの語らい。

愛といい、正義という、不毛の観念に翻弄され、
誰もがたがいに呼びあわず顔をそむけていた、
痛みを分かちあうこともなくただ他人を責めていた、
ひたひたととめどなく押し寄せてる死者の群。

暮れかかる砂漠の廃市、汚濁した海、

汲みあげても汲みあげても尽きぬ死者の悲しみ、
きみたち死者の記憶にもあの黄金の果実があるか。

はるかに天をつんざく雷鳴、耳底にはしめやかな潮騒、
内湾に嗚咽してやまぬ死者たちの慷慨。
雷鳴よ、私たちはもっと寛容でありえたか。

この詩を論評している平出隆氏によるとこの詩は湾岸戦争に際して書かれたものである。平出氏は「多くの詩人たちが反戦詩を書いたつもりが戦争詩を書いてしまった」、「テレビや写真をとおしてマスコミから与えられた映像を、茶の間で見て想像を逞しくする、という構図ばかりが見えて、それだけで恥ずかしかった」と当時を振り返っている。そして、その中の例外として、中村稔の作品は「語られる事柄の殺伐たる散文性・現実性によって詩が空疎に落ちないために」、「細心の細工を施」し、「詩のささやかさを含羞しながらそのささやかさを理知の手法で鍛えている」詩であると評価しており、やはりそこには、詩の無力さが語られている。

　現実や思想の散文性に引きずられないための頭韻や脚韻。散文ではなくソネット形式という韻文によって現実を批判するという困難を極めた挑戦は言葉の持つ無力さを自覚し、言葉に力を与えようとでもするかのように思われる。

◇

そして、最後に藤井氏の詩について触れたい。
「アメリカ政府は核兵器を使用する」という詩は一風変わった詩である。一見、散文と変わらない印象を受ける。長いので最後の部分だけ引用する。

この予言は当たらないことでしょう
すぐれた予言者が予言をすると
予言された現実が逃げてゆき
なにも起こらない、ということをきいたことがあります
予言は当たらないことになるから
予言者はさげすまれ世に容れられなくなります
わたくしはいまだけであるから
すぐれた予言者でありたいと思わずにいられません

（「アメリカ政府は核兵器を使用する」『湾岸戦争論』から引用）

シャーマンというのは過去を言い当てることをするのだそうだが、シャーマンが優れた能力を身につければつけるほど過去を言い当てられなくなることがある。言い当てる能力が強くなって、言い当てられる現実の方が逃げるからではないかというのが藤井氏の考えである。そして、シャーマンが過去を言い当てるのに対して、未来を言い当てる能力が身に付いてきたと感じる藤井氏が「アメリカ政府は核兵器を利用する」と予言することによって言い当てられるはずの現実が逃げていくことを願うというのが引用した詩である。

　この詩は当時、藤井氏の言葉を借りれば「批判の憂き目にあ」ったのだが、自身は「イラクの男たち、子供たちの頭上に残忍な兵器の光線をついにひらめかせなかったことをもって、自分一己はこの作品にかろうじて及第点をつける」と述べている。

　藤井氏はここでも言葉の無能さを確かめている。有能なシャーマンのように既にあったことまで変えられるとは思わず、ささやかに未来を言い当てようと企てるのである。その結果できた詩は、私としても、あまりに散文的な言葉で詩的なものを感じなかったという点で物足りなさを感じたが、逆に、藤井氏の「予言者の論理」「言葉に対する信念」こそが詩であると感じたのだ。藤井氏が自作を解説しなければその思いを受け取ることができなかっただろうが、その思いこそがもっとも詩らしく感じられたのだった。

◇

この三人の詩人は共通して、ある意味では言葉の持つ力を信用しておらず、しかし、それにもかかわらず、ある意味では信じているのがわかる。

　この三人の詩人は「戦争反対」のような言葉そのもの、ありのままの言葉では手強い現実に切り込んでいけないと悟っているのである。詩人自らの思想を表すには大雑把過ぎ、言葉の受け手に伝わるためには日常的に過ぎる。

　しかし、一方で言葉や思想をありのまま対象に向けるのではなく、手強い現実の搦手を狙い、言葉に細工を施す。その結果、言葉や思想は詩人の思いを乗せて現実に対抗する力を得ている。その時彼らにとっては、「言葉」は信じられないかもしれないが、「詩の言葉」は信じられるようになるのである。

　詩の言葉は無力だという時、詩人の目の前には動かさずにはいられない手強い現実があり、詩の言葉の力を妄信する詩人の前にはそれがないということになるのかもしれない。

【同人短信　From the GATE】

柴原　利継

先日、ＬＥＤ電球を買った。渡り廊下にある白熱電球が切れたからだ。取扱説明書には、この電球はおよそ四万時間使用可能と書いてある。しかし、考えてみると家でその電球を灯している時間は、せいぜい一日一時間程度だ。一年間で三百六十五時間。仮に四百時間使うと見積もっても、百年は持つことになる。おそらく、百年後には渡り廊下はおろか母屋でさえ朽ち果てていることだろう。果たして、これはエコロジーなのだろうか？と、しばし考え込む。

■

福田　恒昭

作品の良しあしと無関係ではないと思うのだが、楽しんで書いた詩がある一方、少しも心を沸き立たせることもなく書いてしまった詩がある。何かを創るということは今の自分を少しだけでも乗り越えることで、それはデカルト的自我みたいなものを放り出して、何かに自分をゆだねることでもある。そういう瞬間が訪れると書くことが楽しい。そういえば詩を書くときにはたいてい何か音楽を聴いていて、今回はSHERBETSというバンドの「GOD」という曲にずいぶんお世話になった。その放埓な勢いみたいなものから自我を放り出す勇気をもらおうとしながら、百回くらい繰り返し聴いたのではないかと思う。

■

大隅　晃弘

今回のテーマは長編詩と短編詩。詩という概念では、盛り込む内容は自由であるにしても、行数を規定されるというのは、かなり強い縛りであることを痛感した。短編詩を書かせていただいたが、たかが4行といえども、一向に筆が進まない。味気ない文面に情報が盛り込まれる夕刊紙の3行広告に、ちょっとした物語を想起させるようなものを書きたかった。苦労しながらようやく書いたが、合評会では理解困難と評され、再び白紙からのスタートとなった。

４行という必然的な形式が必要な詩とは、いったいどんな詩であろうか。合評会でも話題になった。４行は起・承・転・結を意味するというのが一般なのだろうか。４行に凝縮された文字群の姿に意味を見出すとの考え方もあるようだ。確かに4行というゴールを目指すとき、起承転結というストーリーをイメージしながらも、書き上げた4行がつくり出す文字群のスタイルが気になる。

行脚を揃えるべきか、行の長短を強調するか。それとも、１行あたりの字数を増やして散文を装うか。１行を愛しみ、１行を惜しむ。そんな葛藤の奇跡が短編詩を書く魅力なのかもしれない。

■

生駒　正明

雪の降る中、日本科学未来館の「テオヤンセン展」に行った。ずっと行く機会をうかがっていて、終了直前にうまく子供達をだまして連れ出すことに成功した。

私は不幸にして今まで彼のことを知らなかったが、正月のテレビで偶然彼の作ったストランドビーストを見た。砂浜に棲息し、風を食べて、岩にぶつかることもなく、海で溺れることもなく歩き回る、プラスチックチューブでできた「生命体」である。ヤンセン氏はこのプラスチックのビーストを、生命体に見立て、徐々に進化させてきた。今では生殖にも成功している。といっても、ビーストの生殖とはテオヤンセン機構といわれるビーストの足の動きが様々なバリエーションとなって世界中に広がっていくことだとヤンセン氏自身は解釈している。実に面白い生命体の比喩だと感じた。

今回の四行詩には苦労した。高橋順子氏の『幸福な葉っぱ』の「四行詩の道草」を参考にした。この詩集に四行詩が載っていることは『詩のレッスン』で知った。入沢康夫氏が「きわめて独特の感受力と、かなりの年季をかけた努力、そしていささか古風な言葉で言えば『精進』の結実としか言いようのない『洗練の極みを尽くした』作品群なのだ」と述べているのを読んであきらめにも似た気持ちで書いたものである。

いよいよ次回は長編詩。まずは読んで、いろいろ考えたい。

■

塚本　敏雄

以前その詩集を本誌でも紹介したことがある、私の友人のクリス・ヘイル氏がいまICU（国際基督教大学）に講師として勤務していて、コミュニケーションの授業の他に、今年度は詩に関する授業を行っている。その授業に彼が私をゲストとして招いてくれたので先日彼の授業に行って、詩に関することをあれこれ話をした。

授業は全て英語で行ったので疲れたが、とても楽しい時間を持つことができた。それにしてもあらためて驚いたことがひとつ。

学生たちはいささかなりとも詩に興味があるからその授業を選択しているのだろうが、彼らは詩についてほとんど知らなかった。例えば、話の中で、谷川俊太郎の『ミニマム』という日本語原詩と英訳によって構成されている詩集について触れたのだが、谷川俊太郎って知ってますかと問うと、知らないと言う学生が結構いた。

うーむ。

＊

今回のゲストコーナーは松本邦吉氏に登場していただいた。

松本邦吉氏は、かつて松浦寿輝、吉田文憲、朝吹亮二、林浩平の四氏とともに詩誌「麒麟」を出していた。大学生であった私は、当時愛読していた。しかし彼らがその詩誌を出し始める前から私は松本氏の詩が好きだった。それよりも少し前に出た『星の巣』という松本氏の詩集をたまたま書店で買い求め、一時期はいつも鞄の中に入れて持ち歩き、暇さえあれば読み返すということがあったからである。

私にとって、今回松本氏に原稿を頂けたことは望外の喜びである。松本氏には、近著として『灰と緑』（書肆山田）という詩集がある。これもとても素晴らしい詩集。最近は句作もおこなっているとか。近いうちに句集を拝見する機会もあるのだろうか。

松本邦吉氏には重ねてお礼申し上げます。

＊

次号発行は六月を予定している。寒かった今年の冬はとっくに終わり、汗ばむ季節となっているだろう。